

ルビの効用

俳句における振り仮名の用法と意義 ●佐竹秀雄



振り仮名はルビとも呼ばれる。日本の五号活字の振り仮名に使われた七号活字が、英国でルビと呼ばれていた活字とほぼ同じ大きさであったことがその由来だという。したがって、ルビというときは本来振り仮名用の活字のことを意味していた。しかし、現在では振り仮名もルビも同じものをさして使われている。

振り仮名そのものの歴史は古く、平安時代に漢文訓読のための傍訓という形で用いられていた。それが、室町、江戸と時代が下るにつれて、読者へのサービスのための振り仮名が行われるようになった。そして、読み物が大衆化するとともに、振り仮名が増えてくる傾向にあり、明治になると、振り仮名は最も多量に使われた。

しかし、一九三九（昭和十三）年、国字国語問題に関連して、山本有三が振り仮名廃止論を提唱した。振り仮名を使うような難しい漢字を使わない、やさしいことばで文章を書けばよい、印刷の能率を高めることができるなどが、その主な論点であった。これに対する反対論もあったが、賛成論が多

く、振り仮名は廃止の方向に傾いた。そして、第二次世界大戦後に制定された当用漢字表の使用上の注意事項には、「ふりがなは、原則として使わない」と明記された。ここに、振り仮名は肩身のせまい立場に追いやられることになったのである。もっとも、現在においても、一部には振り仮名有用論も残っているのであるが。

大まかに言って、振り仮名はこのような歴史をもっているが、本論では、俳句の世界で、振り仮名がどのように使われているか、そして、振り仮名はどのような意味をもっているか、について考えてみたい。

振り仮名の用法

振り仮名は、一般にはどのような用法を持っているのだろうか。これについては、すでにいくつかの研究がある。ここでは、進藤咲子「ふりがなの機能と変遷」（『講座 日本語学 6』、明治書院）と『国語学大辞典』（東京堂出版）における「振り仮名」の記述（執筆者・大石初太郎）とをもとに、大

まかに分類して示す。

まず、振り仮名がつけられる語（多くの場合は漢字で書かれた語）と、振り仮名との関係に着目しよう。すると、三つの場合が考えられる。第一は、振り仮名が単に漢字の読みを示すだけのもので、いわば漢字が主で、振り仮名が従の場合である。第二は、漢字で書かれた語と振り仮名がお互いに対等で、両者が助け合ってなんらかの表現効果をもたらす場合である。そして、第三は、振り仮名が中心で、振り仮名を付けられたほうが意味を明確にするなどの補助的な役割を果たす場合である。

その三つに大きく分類し、さらにそれぞれに小分類を加えて具体的な例を挙げると、次のようになる。

Ⅰ 漢字の読み方を示す。振り仮名は補助的で、誤読や難読による読みつかえを防ぎ、幾通りにも読める漢字の読みを一つに指し、本文を読み下す助けとなる。

① 読みが困難と考えられる場合、読みを助けるために用いるもの。

例 「齧歯」^{くわし} 「回向」^{くわう} 「桎梏」^{しつこく} 「忸怩」^{じゆじ}

② 人名・地名などの固有名詞の読みを示すもの。

例 「折口信夫」^{せぐちのぶお} 「西表島」^{さいへいじま} 「倭名類聚抄」^{わなるいよしょう}

③ 熟字訓やあて字の読みを示すもの。

例 「父親」^{おやじ} 「三和土」^{さんわど} 「啄木鳥」^{つくもどり} 「英吉利」^{ひやうきり}

④ 二種以上の読みをもつ漢字に対し、その読みを限定するもの。

例 「自」^{おの} 「ら」^ら 「唐紙」^{からし} 「間を置く」^{まをく}

Ⅱ 振り仮名によって示された語が本文の漢字表記語の意味を示す。一方、振り仮名がなす語は本文の漢字によって意味が限定される。

⑤ 意味を漢字で示し、音を振り仮名で示すもの。

例 「露見して」^{はつみ} 「無賃乗車」^{むちんじや} 「勤務」^{くむ} 「精神」^{しんしゆ}

⑥ 同音・同訓の語がある場合に、漢字で意味を識別するもの。

例 「自動車」^{くるま} 「診る」^{しん} 「お寝み」^{おのみ}

⑦ 方言・隠語などの特殊な語や音を示すもの。

例 「御寮人さん」^{ごせうじん} 「くちばしの長か鳥」^{ながトリ} 「前科」^{まへこ}

⑧ 特殊な工夫のあるもの。

例 「中国の一流コックがつくる中国の味」^{ちゆうごくのいちりゆうこくが つくる ちゆうごくのあじ}

Ⅲ 振り仮名が本文の役割を担っており、振り仮名を付けられた語がむしろ補助的である場合。

⑨ 漢字の示す語が、振り仮名の意味を示すもの。

例 「なかなかの手練者がそろっている」^{なかなかなのてねり者がそろっている}

「継布があたっている」^{つぎふがあたっている}

⑩ 漢字の示す語にあたる外来語を振り仮名で示すもの。

例 「権威」^{グンイ} 「理念」^{ライエン} 「像」^{ゾウ} 「談話」^{タンワ} 「卓子」^{タクシ}

「国民総生産」^{グンミンソウセイサン}

右のⅠのグループで、①は最も普通の振り仮名で、読むのがむずかしいと思われる場合に付けられる。教科書などで

は、むずかしいかどうかにかかわらず、常用漢字表にない漢字や音訓に対しては振り仮名を付ける。そういう場合もこれに含まれる。また、②の固有名詞、③の熟字訓・あて字は①の一種とみなすこともできる。④は読めないむずかしいでなく、「みずから・おのずから」のように「通りに読めて、どちらに読むかがむずかしい場合である。

Ⅱは、漢字が意味を、振り仮名が読みを表すが、その両者の関係が一般に固定されていない、非標準的、一回限りの読みとがセットになる。ところが、「勤務」の「勤務」と「つとめ」のように、その場だけの読みといえそうなものである。そして、その振り仮名が非標準的であるぶんだけ、漢字と振り仮名とで二重の表現をしているともいえるのである。つまり、漢字に読みが付随しているのではなく、両者が意味と読みとを補いあっている、両者が合わさって一つの表記を構成している関係にある。

ⅢはⅡと似ていて、分類するのがむずかしい場合もある。特に、⑨はⅠの⑤と連続しており、境界があいまいである。その違いは、ⅢがⅡに比べて、表現の中心が振り仮名に、より重く傾いている点にある。たとえば、Ⅲの「なかなかの手練者がそろっている」では、読むときはあくまで「てだれ」であり、「手練者」は「てだれ」をサポートする表記だとみなされるのである。それに対して、「無賃乗車」は「ただのり」と「無賃乗車」とが両者一体となっていると判断する。もつ

く、ある程度の傾向が得られた。

前節での分類に分けて整理すると次のようになった。

I 漢字の読み方を示す

① 難読

② 固有名詞

③ 熟字訓・あて字

動植物 16

その他 5

④ 誤読をさける

「馬穴の空の蟬しぐれ」

Ⅱ 非標準的、一回限りのもの (18)

⑤ 読み方を指定

⑥ 同訓の識別

⑦ 特殊な語や音

Ⅲ 振り仮名が本文の役割

⑧ 漢字が意味を

⑨ 外来語

Ⅳ その他 (13)

右の結果で、Ⅰのグループの数が多い。漢字の読み方を示すという振り仮名の基本的な使い方であるが、それが全振り仮名の一二九例のうちの七八例、六割以上を占めている。①の難読に対するものと、④の誤読をさけるためのものに次いで、動植物に対する振り仮名がかなりの数にのぼるのが注目される。そして、それらの多くは「天牛」「淡竹」のように、

とも、この認識には個人差があり、人によって分類の判定は違ってくるかもしれない。

なお、振り仮名の用法には、以上のほかに次のようなものもあるが、今は取り上げない。

⑩ 中国語またはローマ字綴りの原語の読み方を示すもの。

例 「白板」「haughty」

⑪ いわば和文英訳・英文和訳式で、振り仮名が外国語なし日本語であるもの。

例 「完璧な間合」「Good morning」

⑬ 片仮名に平仮名の振り仮名を施すもの。主に、幼児のためのもの。

例 「グリーンシャ」「トンネル」

「俳句研究」に見る振り仮名

それでは、俳句の世界では、振り仮名がどのように使われているのであろうか。一つの小調査を行った。「俳句研究」一九九二年八月号と十月号の三冊を対象に、作品として提示されているものから、振り仮名の付いている箇所を抽出した。そして、それがどういう表記意図で付けられているかを分析した。もちろん、その分析は推測によって判断したものであり、句作者の正確な意図をとらえたという保証はない。また、わずかに三冊で俳句全体の実態を正確に把握できるものではないだろう。まして、数量的にどうこう言えるものではない。しかし、結果を見ると、まったくの無意味なものではな

一般にはなかなか読めない語の場合である。そう考えると、俳句では、読み方に留意して、かなり丁寧に振り仮名が付けられているように見える（これについては異論があり、後に述べる）。

Ⅱのグループは全体としてあまり多くない。⑤は「馬鈴薯」と「いも」「電球」と「たま」のように、意味と音とを分担して補いあっているものである。

⑥は、「断る」がその典型の場合で、「大根切る紫まだらの足も断る」(星野石雀)と使われている。「切る」と「断る」との両者を対比させており、意味の識別を漢字が担っている。そのほかの例の、「発く」「幽し」は漢字で書くなら「暴く」「暗し」が標準的であるし、「煤む」もふつうは平仮名で書かれるところであろう。

ところが、そうした標準的、一般的な表記を使わず、非標準的な漢字表記を用いることによって、よりくわしい意味やこまやかなニュアンスまでも表そうとしている。漢字が意味明示の役割を果たしているといえよう。

⑦は、「古酒」「海霧」といった方言形や、「のこぎり」を「のこ」と省略したものなどである。

なお、前節で述べた分類の⑧に当たるものはみられなかったことも注目される。

グループⅢも多くない。漢字が振り仮名の音の意味を表す⑨では、「銅」「畔」のようなやや古めかしいことばが使われ、その意味の説明に漢字が使われているものが多かった。

また、⑩は外来語の場合で、やはり意味を漢字が説明している形になっている。

最後のⅣのグループは、そのほとんどが、特に振り仮名が必要とは思われないのに付けられている場合である。たとえば、「切り捨てしもの潔し」「要らざりき」などの「潔し」「要る」で、読み方が特にむずかしいわけでもない（いづれも常用漢字表に示されていて、中学校までに学ぶ）し、文脈上で誤読のおそれがあるわけでもない。考え方によっては、無意味な振り仮名である。

俳句における振り仮名の意義

以上の小調査の結果、全体的な傾向としては、読み方を示すところに振り仮名が多く使われているという特徴が認められた。読むのがむずかしい漢字、読み誤るおそれのある漢字に振り仮名が多く付けられているのである。これにより、一見、俳句作家が読み方に配慮しているかに思われる。

だが、実際にはそうではない。というのは、むずかしい漢字のすべてに振り仮名が付けられているわけではないからである。たとえば、調査した中に同じ九月号で、「片虹や逆さ睫毛に老いられず」（河野南睦）では「睫毛」に振り仮名が付いていたが、「未央柳の一夜一花の長睫毛」（野澤節子）には付いていなかった。八月号では、「赤鯉」に振り仮名を付けている作者が、よりむずかしいと思える「蟾蜍」には振り仮名を付けていなかった。また、「二通りに読める「銀杏」に

振り仮名が付いていない例があった。そして、この種の例は数ページめくるだけで多数見つかるのである。

もう一つ、読み方への配慮が十分でないと思える理由が、調査でのⅣグループの、振り仮名が必要とは思われないものに対して振り仮名を付けていた事実である。むずかしい漢字に振り仮名を付けず、それほどでない漢字に振り仮名を付ける。このアンバランスな状態を考えると、読み方について十分配慮しているとは思えない。

もちろん、同じ漢字表記でも人によって、むずかしいか否かの判断は違ってこようし、同じ人でも、どの漢字表記をむずかしいとするかの判断は違ってくるのは当然である。しかし、そうした事情を考慮しても、なお、振り仮名の付け方はまちまちで恣意的である。

そもそも俳句における振り仮名は、音声と表記をどう考えるかという問題と関連する。俳句を「音声だけで成り立つ」と考えるのか、「表記されて初めて完成する」と考えるのか。前者の立場に立てば、漢字は不要とまで言わないにしても、俳句を書き留めるとき、漢字はやさしいものだけを使うのが原則で、読みにくい漢字表記を使うときには、必ず振り仮名を付けることになる。また、後者の立場であれば、漢字表記と振り仮名とを連動させた、工夫した表記が多くなるであろう。

そして、俳句の実態はというと、むずかしく見慣れない漢字表記が振り仮名なしで多く使われている。このことは、俳

右城暮石帰郷記念全国俳句大会

趣 旨

高知県長岡郡本山町出身で蛇笏賞受賞の俳人右城暮石先生帰郷を記念するとともに、俳句の普及、文化の振興を図ることを目的とする。

日 時

平成五年四月二十五日(日) 正午受付 午後一時開会

会 場

高知県長岡郡本山町本山五九六九 本山町プラチナセンター 文化ホール

作品募集

○雑詠二句一組 (何組でも可、必ず未発表作品のこと) 規定の用紙または二百字詰原稿用紙(B5)を使い、一組ごとに、住所、氏名、俳号(ふりがな)、電話番号と前後祭俳句大会への出席の可否をお書き下さい。

◆ 授 料

○授句料 一組一、〇〇〇円(小為替または現金書留に限る) ○授句締切日 平成五年二月二十八日(当日消印有効)

◆ 授 句 及 び

○授句及び 千七百三十三 高知県長岡郡本山町本山五九六九 本山町立大原富枝文学館内 問い合わせ先 実行委員会

◆ 選 者

伊丹三樹彦・茨木和生・右城暮石・桂信子・草間時彦・(五十音順) 高木晴子・能村登四郎・星野愛丘・細見綾子・森田祥

◆ 賞 状

大会賞 (選者特選各一句) 選者色紙、記念品 入選 (選者入選各三十句) 記念品

◆ 表 彰 式

授 賞 式 (四月二十五日) 記念講演 講師 大原 富枝

◆ 講 演 会

講演 大原 富枝

◆ 開 演 行 事

(1)前夜祭 四月二十四日 本山町プラチナセンターふれあいホール 参加者懇親会 会費 五、〇〇〇円

◆ 主 催

(2)当日吟 大会当日、当日吟入句を募集会場に用紙授句箱 (3)右城暮石展 右城暮石先生帰郷記念全国俳句大会実行委員会、本山町俳人協会、現代俳句協会、日本伝統俳句協会、高知県俳句連盟、高知県、高知県教育委員会、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、高知新聞社、NHK高知放送局、KUTVテレビ高知、RKC高知放送

句が音声だけで成り立つというより、表記されて初めて完成する立場に立つことを意味すると思える。しかし、それならば、音声と表記の関係について考慮し、振り仮名を活用した俳句がもっとあってもよいのではないか。振り仮名の分類で言えば、ⅡやⅢのグループの表記がもっと多くあってもよいはずなのに、それが少ない。特に、⑧「特殊な工夫のあるもの」に分類される例は、まったく見当たらなかった。つまり、いずれの立場に立つにしても、現在の俳句は、振り仮名を十分に活用しているとはいえない。

俳句が、現在のように、むずかしく見慣れない漢字表記を使うのであれば、もう少し振り仮名に配慮すべきであろう。どんな名句であっても、読めない、あるいは間違えて読まれては何にもなるまい。俳人によっては「俳句の世界では、この程度の漢字は読めないとおかしい」などという意見もある。ようだが、それは俳句を狭い世界に閉じ込めるだけである。俳句の素人にも感動を与えるためには、振り仮名をもっと活用するべきではないか。

また、工夫によって、漢字と振り仮名とで二重表現の効果をもたらすことができる。ことばの数に限られている俳句にとって、振り仮名を活用した二重表現は一つの有効な表現手段ではないのか。

このような意味を考えて、今一度、振り仮名を活用した表現効果について考えなおしてもらいたいと思う。

ルビ不要論

言葉に無理はさせじ……●島谷征良



ルビとは英語に由来する語である。『小学館ランダムハウス英和大辞典』から ruby の説明を引用する。

ruby [ru:bi] (名)

- ① ルビー。紅玉。赤色の鋼玉石。
- ② (時計の軸受けなど) ルビー (模造ルビー) で作ったもの。
- ③ 深紅色のポートワイン。赤ぶどう酒。
- ④ 深紅色。洋紅。
- ⑤ [英] [印刷] ルビ型活字。5 1/2 ポイント。米国の adobe とは同じ大きさ。

5 1/2 ポイントの大きさの活字を何ゆえに ruby と呼ぶことになったのかは審らかでないが、寶石の一種ルビーに関わりのある語であることが興味深い。日本の号数活字では七号活字にはほぼ同じで、この呼び方が日本の印刷業界で漢字の脇に付ける七号活字、すなわち振り仮名(傍訓、付け仮名ともいう)を意味するようになった。ruby ⑤は飽くまで活字の大きさ(この場合、小ささと言うべきか)を表す語であるのに

「じんかん」と読んで採って下さった。二句目の「いが」はさほど深い意識もなく付けたように思う。むしろ「焼場」の方に悩んだ記憶がある。師の石川桂郎に、

露の火葬場 最少の火を母へ擦る

というルビ付きの句があるからだ。私の句も火葬場のことだが、「火葬場」と同じで表記法はいやだったのである。そこで「やきば」に素直に相当する漢字「焼場」を選択し、それでもしごみ焼場だと受け取られたら、そう受け取った方が悪いのか、そう受け取られたこの句が悪いのか、いずれにしても二ツに一つだと聞き直ったのである。この聞き直りの気持がもう少し強ければ、たぶん「人間」にも「毬」にもルビは付けなかっただろうと思う。秋元不死男氏が「じんかん」と読んで下さったことに、もっと意を強くしておればよかったのだ。

その後刊行した二冊目の句集では、いっさいルビは付けない。雑誌等に発表する際もほとんどルビは使った覚えがない。開き直りの精神はいささか強くなったようである。そういうところが「ルビ不要論」を書くにふさわしいと思われたのであろう。しかし、各人が信念によってルビを付けることは自由であるし、私自身いよいよ必要とあらば使うということは絶対にないとは言えない。先に引いた「人間」「毬」といった程度の漢字にルビを付けることはすまいと思っている立場からの「ルビ不要論」である。

対し、ルビは振り仮名のみを意味する語となった。印刷の用語には違いないが、日本に入っていささか変貌を遂げた用語である。

このルビを俳句に使用することは是非を考える本特集に、実は、あいつならば「俳句にルビは必要か」と問われて「要らない」と答えるに違ひなからうと白羽の矢を立てられて、「ルビ不要論」を書くこととなったのである。ではあるが、今までルビ不要という確たる強い意志をもっていたとはいえない。二十年ほど前に出した私のささやかな句集をひもといてみたら、二句にルビが施してあった。

人間に毛深き蠅の生れけり
栗の毬あをし焼場の裏通る

一句目は「じんかん」(人の世。世間)を「にんげん」と読まれたくなかったからである。句会の折、ルビなしで投句したら互選で一点も入らなかつた覚えがある。もっとも、その句会に選者として臨席いただいた秋元不死男氏ははじめから

もう少し桂郎と関わって述べることをお許しいただきたい。桂郎の第一句集『含羞』には、振らずもがなのルビがかなり多い。「醜」「貌」「唇」「岩魚」その他、後年の桂郎ならルビなしで用いたであらう。これらのルビは読者へのサービス精神から付けられたものと思われる。ただ、次のような句はルビなしでは読み難い。

花の雨みごもりし人の眉剃る
脂肪つ氣十日も絶やし雪の梅
妻にして脂取紙あり復活祭
甘藷の籠にはうと張る腰仮祝言済み

第二句集以降は前者のルビはほとんどなくなり、後者の方は佐渡へ、或いは高山へと句作りの旅も多くなる関係から、むしろ多くなる。

かまくらに給ぶ甘酒硬貨置き
片照りの父の割戸や春日差
何負ふや歩荷のマントぬきえもん

表現領域を広げるために方言や俗語、特殊な語を漢字で書き、その脇にルビを付す。そういう例を拾い出していたらしきがない。ルビによる豊渾な表現領域はむしろ非常に魅力に満ちた世界でもあることを、私は桂郎作品からも多く学んだことは事実である。

しかし、私が直接師事した五十代後半から六十代にかけて

の晩年の桂郎は相当ルビの美学から遠ざかり、最後の句集

『四温』にはほんの数句にルビが施されているに過ぎない。

その頃、桂郎は言葉の使い方について以前にも増して敏感になり、次のようなことをよく口にするようになった。例えば、「冬の陽」という言葉を使った句について言下に否定し、

「冬の日」で解るような句でなければならぬ、とした。季

語「冬の日」は冬の一日を表す場合と冬の太陽を表す場合とがあつて紛らわしいことは確かだが、後者であることを「陽」

で示すべきではない。一句全体の構成から、おのずから冬の

太陽の意である「冬の日」が読者にたちどころに解る句でなければならぬのである。この考え方は私を大いに納得さ

せ、俳句における表現の厳しさを改めて知らされた思いであつた。「陽」は「ひ」と読み、「陽」というルビ付きで用いられる例もあり、「陽」だけでもわれわれは目には見えない

「ひ」というルビを感じ取るのである。

ルビに頼る糸口はさしずめこの「陽」あたりであるが、更に進むと「老母」「亡母」などに「はは」とルビを付けた

あるいはルビなしでそう読むように求めたりする。

私は、やっぱりこれは強引だと思う。「老いたる母」「亡き母」と、きちんと表現すべきなのだ。そういうことを言う

と、決まって次のような反論がある。「俳句は極端に短い音数の詩なのだから、その程度は許されて当然である」。果し

てそうだろうか。俳句は短いから言葉に多少の無理をさせていいという考え方は一見もっともな理屈である。中には、そ

れだからこそ多少の無理は積極的に行なうべきだとする意見もある。しかし、短いがゆえに絶対に言葉に無理に使う

はならないとするのが私の信念だ。例えば、日常会話の中で母を喪った人がお世話になった方に、「母がお世話になりました」という。その「母」は「亡くなった母」を意味する。

「はは」とだけ言って「亡くなった母」であることを十分に指し示している。だったら、俳句でも「亡母」は「はは」で

もいいではないか。こんな理屈もあるかと思う。ところが、日常会話や、あるいはそんな情景を小説やドラマにする

時は、そこに至るまでの経過ということがある。それを踏まえて、言葉の送り手と受け手の間には共通認識がある。俳句

というのはその共通認識をこゝろ細かにできない世界なのである。できないのに敢えてやろうとするから言葉に無理を強

いる。無理を強いられたい言葉はどうなるか。かろうじて意味を傳達する使命は果すが、それが感動や美意識その他もろもろ

の俳句にとって大切なことの表現に影響を及ぼさないと考えられるだろうか。

俳句は物の言えない文芸だと言われている。もちろんその短さのゆえなのだが、もともと漢詩も含めて日本人が古来作り続けてきた詩は物を言わない詩であつた。「陳志寄物」の精神、すなわち物に託して作者の思いを述べる、あるいは物に作者の思いをおのずから語ってもらふという姿勢があつた。かつて和歌はルビによるのではなく、言葉そのものによる修辭を極限にまで押し広げて、その結果、枕詞・序詞・掛

詞などを駆使し、作者の思いを直接述べる語を限りなく少なくしながらいよいよ思いのたけを言い尽くす手法を編み出して

いた。「新古今和歌集」はそれらの集大成とも言える。その精神は時代が下るにつれて短歌の方ではなく、むしろ俳句の方に色濃く受け継がれて来たのではないか。むしろ、全

面的にはではない。一部分ではあるが、季語とも季題ともよぶ言葉は季節に関する事柄に限定しながらもかつての和歌の修

辭の俳を残している。切字はそれを表現技法の上から補足する働きを果す。「秋風」と言えば、それが秋に吹きわたる風

の実体を表すとともに、「秋風や」と切字を伴うと完璧に枕詞兼序詞兼掛詞となつて、作者がそこで何を言おうとしてい

るか述べなくていい仕掛けができてしまうのである。下世話な言いまわしで「それを言っちゃあ、おしまいだ」という

がある。「秋風や」と来たら、あとはそれを言つても邪魔にならない言葉で作らねばならない。物を言えない文学、と

いうのはたかだかこの百年のことであつて、実体はその十倍に及ぶ物を言わない文学の伝統があることをかえりみるべきである。そうすれば、近代人、あるいは現代人と自負するわれわれがルビを使って悪戦苦闘する姿がどんなものであるのか、自然と判ってくる。ルビがルビに関わりのある語は英和辞典の助けをかりて解るが、俳句にとつて真にルビに相当するものは言葉に無理をさせるルビではないということだけは強調しておかねばならない。

ルビに限りなく近い送り仮名がある。「金」「夜ル」などがそれだ。「金」を「かね」、「夜」をよと読み誤まれたくない作者側の熱意の表れだが、私には熱意というより妄執に近いものと目に映る。ルビも送り仮名もなしに「金」と書いて、それで「きん」と正しく読まれなかつたら、一句の構成が正しくないということであろう。俳句は（俳句に限らないだろうが）いったん作者の手もとを離れたら独り歩きす

平成4年1月創刊 会 員 募 集

おすかしなく やさしくなく んどは俳句の万華鏡

俳誌

る ん ど

主 宰 鳥 居 お さ む

る ん ど 発 行 所

誌 代
半 年 4,500円
一 年 9,000円

〒167
東京都杉並区上井草1-28-2
☎ 03(3395)8380 鳥居方
FAX 03(5382)1494
振 替 東 京 5-702107

る、とは俳人の多くが言う。独り歩きするのに保護者が見え隠れして付いてくるようなもので、半送り仮名もルビ同様に私は考えている。

昭和初期、極端にルビ俳句を推進しようとする俳人がいた。風間直得がその人で、俳誌「三昧」や「紀元」でルビ多用の俳句（自由律）を発表、句集「直得六百句選」がある。

あかる陽はひる 道づれの朱ヶ山橋
鴉止へる鳥は月照り木 おぼろに渡り

現実とそこから得た感情をすばやく濃密に表現するための技法と伝えられているが、「椿」を「つ」、「月」を「よ」と読ませるのは、さすがに言語に対する慣みを喪ったとしか言えない。晩年の河東碧梧桐もルビ俳句に入れ込み、

築落の奥降らば鮎はこの尾鰭る
明日雪になるやの西空の星を見かけて出る

といった作例を遺している。漢字・漢語の訓読はわれわれの祖先が長い間かかって曲りなりにも打ちたてて体系を作り上げた外国語（字）の日本式消化法ともいべきものであった。その恩恵の大きさに比して、直得や碧梧桐が行なわんとした事業、すなわち表現領域や技法の拡大に対する熱意のほどは解らぬでもないが、あまりに普遍性に欠けるということとは誰の目にも明らかである。この所謂「ルビ俳句」はほどなく歴史から姿を消した。だが、近・現代人の表現意欲という

以上、実作者としてルビを極力使わないのが、いわば理想だという立場から意見を述べた。ただし、研究・注釈の場合はルビ多用大歓迎である。先日私の句会のメンバーの一人に「茶の」「じつとして馬に駢るる蛙かな」の読みを問われた。その人はまた別の、俳句を作らぬ人から問われたらしい。彼女が「俳句を作っているのなら、これくらいの字は解るでしょう」と言われて解らなかつたのが「駢」の読み方である。「駢」は「鯁」の誤りで、「鯁ぐ」は「かぐ」と読む。

じつとして馬に駢がるる蛙かな

一茶の誤用か書き間違いであろう。これまた理想を言うが、問われた人が読めぬことを何とかしようと努力する姿勢が要る。「駢→鯁」であることは豊富な研究書注釈書を努力して見いだせばわかることなのである。

まして、辞書や歳時記をひもとけば出てくる字に対して、

のはなかなか強いものがあって、新興俳句、社会性俳句、前衛俳句などの革新的な俳句近代化運動にはルビが果たした役割は少なくない。伝統的な俳句を作る側も先述したように「亡母」と書いて目には見えぬルビで読ませる傾向があることを思うと、このルビ論議は意外と深いところまで、俳句のみならず日本語の問題点を洗い出してくれるかもしれないという予感がする。

近代の詩を見わたすと、もっと鮮明だ。日夏耿之介の『転身の頌』から「かかるとき我生く」を引く。

大気 澄み 蒼穹晴れ 野禽は来啼けり
青き馬 流れに憩ひイチ
纖弱き草のひと葉ひと葉 日光に喘ぎ
「今」の日晷はあらく吐息す
かかるとき我生く

日夏のみでない。近代詩はその効用抜きに語れないほど、こうしたルビのお蔭をこうむっている。これらのルビ付き用語がすぐれた詩人の手になる場合、破綻をきたしたり袋小路に陥ったりしないのは、ある程度長く使えて散文に近い形をとり得る型式だからであろうと思う。敢えてルビを付けるまでもない語（ここでは「澄み」「憩ひ」「喘ぎ」）にまでもルビを付け、全体の調べの中に程よく融和させているからである。字数の長短を作者の感動や思惟に合わせて自由にできるものと俳句とを同列に置いてはならない。

画数が多いから、あるいは日常めつたに見かけないものであるからといってルビを付ける必要はまったくない。その程度のもは辞書や歳時記にあたって確認するくらいの気構えが作者にも読者にもなければならぬだろう。読者の便をはかつてはじめてから読み難い語にルビを付けるのは、双方にとって甘えがあるということだ。

辞書や歳時記にもないが、世には存在し、ある一定の規準でそれも読み得るという場合にのみルビは許されるであろう。高校の教科書に虚子の句がこう記載されている。

遠山に日の当りたる枯野かな

「当たり」「枯れ野」ならばルビは要らないそうだ。常用漢字音訓表による規準である。いくら高校生対象でも、これではあまりに人を食ったルビである。

〔執筆者の原稿は旧かなづかいでした。（編集部）〕

韻文精神徹底——新人歓迎

月刊 泉

主宰 綾部仁喜

〒192 八王子市中野山王二一七人

誌代（送共）

半年 500円

一年 900円

見本誌 400円

（切手可）

電話 三三六八

泉発行所

振替 東京 一五四五二〇五

ルビ必要論

一句にルビの輝きを

— 振り仮名の効用と覚悟 —

● 藤村克明



いつの頃からか身中に詮索の虫を飼っているものだから、「俳句にルビは必要か」というテーマを与えられて、「ところで、どうしてルビというんだらう」とまずは広辞苑を繰って満足できず、日本国語大辞典その他いくつもの辞書を食べ散らかしても虫が納まらない。五号活字（10・5ポイント）の振り仮名に使う七号活字が、イギリスの古い活字「ルビー」（5・5ポイント）とほぼ同じ大きさだったから、縮めた形で「ルビ」というようになった——と辞書は説明する。「ルビー？ ひょっとすると宝石のそれと関係があるのではないか」と思っ「ルビー」の項を見ると①が宝石の名、②がイギリスの古活字とあつてまさにその通りだったのだが、では①と②の関係はどうなっているのか、つまり、なぜ活字の名前に宝石の名称が付いているのかを教えてください。辞書は皆無だった。それならこつちで勝手に想像するしかない。ルビーの語源はラテン語の *rubere*（赤い）。古くから珍重された宝石だが、良質のものは三カラット以下の小粒が多いという。山椒ではないが、姿は小さくても貴重な存在だとい

うので命名されたのではないだろうか。更に進んで、それより小さい活字はダイヤといったかもしれない——というのは遊びに過ぎる。それにしても、新聞社で校正を三十年以上もやってきて、ルビの語源を知らないとは情けない話だ。ご承知のように、第二次大戦前の新聞はルビ付きだった。それが戦時中の物資節約令や戦後の山本有三らによる振り仮名廃止運動、当用漢字の制定によって、ルビは原則として使わないことになった。当用漢字にない字は言い換えるか、仮名書きにするのだが、それにも限度がある。そこで新聞では当用漢字以外の漢字（制限字）の下にカッコで読みを入れる方法を採用した。何のことはない、ルビを付けるのと同じことだ。この表記は現在も踏襲されていて、

「イベントは苦悶（くもん）の中で、街づくりへの第一歩をしるす挑戦だった。……『水俣』の二文字が持つ呪縛（じゅばく）から逃れることはできない。……患者代表は差別、偏見への怨念（おんねん）を訴えた。……衰退と荒廃の地の復興を賭（か）けたイベントが……」

のような書き方をするが、もう読者も馴らされてしまったとはいえ、一本の記事で何度も出てくると結構目障りだ。ルビのように一目で理解するわけにはいかないし、カッコの中というのは本来、意味や説明に使うものだから、あまりいい方法ではない。だが、総ルビでなくても、ルビを振るのは活字一本に何本もの小さな活字を添える大変手数のかかる仕事なので、ページ数が増えたこともあつて、そう簡単にはルビ付きに戻すわけにはいかなかった。

もう十年も前になろうか、俳句・短歌欄を担当したことがあった。作品にルビを振ることは許されていたけれども、選評の制限漢字には他の文章と同じように、例のカッコで読みを入れていた。

「精細な把握（はあく）であるとともに、いかにも可憐（かれん）な美しい雛（ひな）の姿を彷彿（ほうふつ）させる」

「秋になると雁（かり）をはじめとして千鳥・鴨（しぎ）・鴨（かも）などの水辺の鳥や、鵜（う）・鶺鴒（ひわ）のような山地の鳥が群れをなして北の方から渡ってくる」

選評は短文なのに、動植物名を始めとする制限漢字がふんだんに出てくるので、これらに一つ一つカッコで読みを入れると、大変目にわずらわしい。

そのうちに、同じページに俳人・歌人による小さなコラムの連載が始まった。カッコに読みを入れると当然、字数が増える。選評の場合はカットの間を詰めたりして何とか操作できるが、行数の決まっているこういうコラムは原文を相当削

らなければならぬ。初めのうちは担当部のデスクがそれをしていて、どうにも困ったのだらう、ある日のこと耳許でそっと囁いたものだ。「このコラムだけルビを使うことにしようよ。どうせ社内の方ではこういう欄はあまり見ないから……」

かくて謀議は成立、小学生のページを除いて唯一のルビ付きコーナーが誕生した。ところがその後、基本文字が大きくなったこと、コンピューター制作の実現で活字がなくなったことから、一面のコラムをはじめ各所にルビの使用が見られるようになった。最近では社外原稿にかなりルビ付きが進んでいる。俳句・短歌欄の選評も同様である。この提言を受けた社の首脳は「そもそもわが社は創刊の際、振り仮名付きを看板にしたのだから」と大きくうなずいたという。

このように部分的にはルビ復活の動きがあるが、新聞の文章全体としては常用漢字以外のものは言い換えるかカッコ方式を守っている。極端な例では俳句・短歌欄の作品にまでそれを及ぼしている全国紙がある。例えば、

渇水期なりしながめや陰（ほと）の神
小心の男にしてこの大嘘（くさめ）

これでは作者に気の毒というか、失礼というか、ちょっと問題である。当用漢字が常用漢字になり、いわゆる制限字はかなり減ったけれども、まだまだそれでは用が足りないの

挫・哨・狙などがそれだ。当用漢字時代には使える字がもつともっと少なく、新入社員は半ば驚き、半ばあきれながら読めない字を懸命に覚えさせられた。誰が見ても難しいものはわかるけれども、なぜこれが駄目なのかと不思議に思う字が結構あった。現在でも嵐・闇・艶・虹・聡などはそのままでは使えない。これらはあわれにも目の敵にされ、校正者が文中で出会ったときは反射的にビリリと感じて退治しなければならない。

ところが、ひとたび仕事を離れて俳句の世界に遊ぶときは、制限字なんかくそくらえで使い放題、書き放題。日頃のストレス解消には一番の良薬である。そういう人間が俳句の振り仮名(ルビ)というのは本来は印刷用語であり、そちらの方は日常でうんざりしているの使いたくない)をどうしているか——。いい加減な話だが、これまではさほどに深く考えたことはなかった。その時の気分振振っているのかもしれない、多少の配慮はしているつもりだが、理路整然たる信念があるわけでもない。ここは一つ、自らの手で自らの俳句を検証するしかないのではないか。こう考えて、昭和六十二年に出した唯一の句集『引墨』を引っぱり出した。

この句集には三百十三句を収録してあるが、振り仮名は約一割の三十一句に使用している。それらを拾い出して仔細に調べてみるとまず疵が目につく。振らずもがなの作である。

立春の限々うごき兎籠

菊の端よりめまといひの移り来し
端の山に影さし入るる春の鶯

「節」と違って同じ漢字を使っても読みを変えている例である。前句は「そば」という意味だから「はた」であり、後句は「ハノヤマ」という調べを大事にしたかった。

近づいて囁く白梅の萼のいろ

は、漢字にこだわった一句。「囁く」は単なる「見る」ではなく「注視する」「引き続いて見つめる」意。白梅の萼の微妙な色への感動を詠みたかった。

石菰咲いて山脈の穢のかくれなし

も漢字一字で効果を出そうとしたため読みが必要になった。

ひぐらしのこゑの縷を聴き午餐用意

「限々」はどう読んでも「くまぐま」で、他に誤りようがないし、それほど難しい字でもない。ちなみに「限」は制限漢字なので、つい商売意識が出たか。

海苔簾に潮満ちくる友の家
風立ちて通草は通草郁子は郁子

は、季語に振り仮名を付けている。季語には振らないのを原則にしている人もあり、特に異論はないが、季語にも難易や頻度の多少があるから、なかなか原則通りにはいかないのではなからうか、もっとも後句の場合、「通草」にも付けた方がよかったかもしれない。だがそうすると少しうるさくなる。だから、読み難い方の「郁子」にだけ振ったのだらう。

星に起き節の変わらぬ法師蟬
花蘇枋齡の節の次が見ゆ

やさしい字だが、「ふし」以外に読んでほしくなかったのだ。「せつ」などと読まれては困る。そういう意識が働いている。

名の山の間の此の山あめのうを
山川の国境なす隼人瓜
冬虹の片方をさがす海の上
初明りして田の畔に雪のある

これらの例も読み方を特定したいための振り仮名である。

これは「昼」を使いたくなくて「午餐」を当てた。

雄翔ちぬ東国の人の足元を

も、ほぼ同じような使い方である。

揚雲雀海榴市の子に道を訊く

は、難しい読み方の地名なので振ったもの。

食ひやうに女手が出て錆の鮎

苦労しているのは、右の句のように振り仮名がないと「オンナ・テガデテ」と読まれてしまう。器用に箸を操って鮎を食べさせてくれた「女の手さばき」を言いたかったのだ。

山の昼人麻呂顔の熟柿喰ひ

も、読みがないと「ジュクシ・クイ」で単に熟柿を食べたと

月刊俳誌

主宰 鷹羽狩行

狩

誌代半年 六〇〇〇円
(送共) 一年 一二〇〇〇円

〒223 横浜市港北区下田町1-21-11

狩俳句会

電話 〇四五・五六・一〇二〇〇
振替 横浜五一一五五四

見本誌500円(切手可)

いうにすぎないが、「シエクシグイ」とすること、動作を表したかった。このほかの例を単語だけ挙げると「絡繰」「胡乱」「柶」「容」「女王」「秀」「夫婦」「強吹」「日最中」「樟」「額」「剃刀」「魴鱈」である。

少し余談になるが、旧仮名で書かれた俳句に振り仮名をするときの仮名遣いは「旧」か「新」か、議論の分かれるところである。単に音を表すものだとすれば「新」だし、振り仮名も全体のひと続きとすれば「旧」だろう。自分としては先ほどの例でもわかるように「旧」でいきたい。そこでだけ新仮名というのはどうも不自然な気がする。

さて、自らの句を眺めてみて、その振り仮名がいくつかの傾向に分類できることがわかった。自分の作品である。そうはいいい加減にできないのは当然といえば当然であった。初心のものではあるが結構いろいろ配慮して振っている。

① いわゆる難しい字……「海苔餅」「絡繰」「胡乱」「魴鱈」「郁子」など

② 二通り以上ある読み方を特定するためのもの……「節」「問」「畔」「端」など

③ 本来の読み方ではないもの……「午餐」「東国」「剃刀」など

④ 誤読の恐れのあるもの……「女手」「熱柿喰ひ」など

⑤ 特殊な読み方をするもの……「容」「額」など

⑥ 一般的でない固有名詞……「海榴市」「女王」など
ごく当たり前のことで、一つ一つ説明するまでもないが、

韻律を重んじる澄雄俳句は漢語、古語を多用するので、どちらかといえば振り仮名を付ける傾向が強いがそれは一にも二にも、正確に読んでほしいと願う作者の心がそうさせるのだらう。振り仮名は一切認めない、誤読するのは本人が不勉強だからだとする結社もあるようだが、それでは俳句の門を閉ざしてしまうことになるのではないか。特に句集は専門俳人以外にも読者は多いのだから配慮が必要だろう。

雁が音の羯鼓のごとき空に満ち 澄雄

で、振り仮名がなければ「そら」と読まれてしまう。

常念岳の夜も見えをり栗の花 澄雄

の場合、これは先に述べた「振り漢字」になるが、「じょうねん」と呼びならわされているからといって仮名だけにするわけにはいかず、さりとて「常念」と表記すれば山の名であ

③ についてだけ少し触れておきたい。以前に平凡社から出た「日本語の歴史」第七巻にルビの話が出ているのを発見、走り読みしているうちに、思わずうーんとうなってしまう。

つまり、振り仮名というけれども、逆に、仮名に漢字を付けた「振り漢字」というべきものが多数存在するというのである。例えば「亡母」「父親」などがその例だ。③の「午餐」「東国」もまさに振り漢字といえよう。この筆者は「これは仮名と漢字のその場限りの野合である」ときめつけている。

それはさておき、自分のことばかりでは心もとないので、師匠の森澄雄の句集中の振り仮名についても調べてみた。

① 雪標 14 (419)	3.3 %	② 花眼 59 (491)	12.0 %
③ 浮鵲 29 (336)	8.6 %	④ 鯉素 48 (381)	12.6 %
⑤ 游方 42 (339)	12.4 %	⑥ 空籬 43 (339)	12.7 %
⑦ 四遠 32 (360)	8.9 %	⑧ 所生 43 (365)	11.8 %
⑨ 餘日 33 (325)	10.2 %		

(丸数字は発行順序、上の数字は振り仮名付きの句数、カッコ内は全句数)

やはり一割内外の句に振り仮名が見られるが、最新句集の「餘日」を例にとると、次のようになる。

「越」(二例)、「乳」(一例)、「讀」(二例)、「環」(一例)、「四方」(一例)、「寝」(一例)、「あり」(一例)、「野」(一例)、「慕」(一例)、「慕」(一例)、「女」(の子) (わらべ) (唇) 「疾風」(一例)、「又抱へ」(一例)、「臥る」(一例)、「常念岳」(一例)、「三十三才」(一例)、「禿」(一例)、「踏坐」(一例)、「簞」(一例)、「肌」(一例)、「真葛」(一例)、「雁」(一例)、「対ふ」(一例)

ることがわからない。

全精力を注ぎこんで作りあげた一句を読者が意の通りに読んでくれないのは、作者は淋しい限りである。振り仮名をしなければわからないような句は作るなどという意見もあるが、さすがに語彙を登場させるためには、振り仮名の効用は大きい。以前に碧門の風間直得という人が、

夕陽の気節風き、今まがふ鳩ア足笛して

のような「ルビ俳句」を提唱したことがあったが、そういう極端なものは別としても、ある程度の振り仮名は必要である。ただしそれは、選び抜かれた説得力のあるものでなければならぬ。要は、一句に賭ける作者の覚悟が、おのずから仮名を振らせるのである。そのとき仮名は、まさにルビの輝きを持つ。

伝統の俳句を21世紀に伝承する

新会員募集

月刊
俳誌

風道

主宰
松本 澄江

初心者歓迎します

(見本誌切手500円)

定価900円 (送料とも)

半年5,400円 1年10,800円

〒150 東京都渋谷区
南平台町13-4-707

風の道発行所

電話 03・3464・8030
振替・東京9-101167

ルビ必要論

振り仮名の必要性・畠山讓二



◇ルビ必要の根拠

俳句にとって「振り仮名」は必要か、否か、ということがしばしば言われるが、各々その立場と見地によって両方に分かれるものと思う。

まず、「俳句に振り仮名(以下ルビと称する)などは必要なし」とする論の側に立つ人たちの主旨は、おおむね次の根拠によるものと考えられる。

- (1) ルビを付けることは句の読者に対して失礼である。
 - (2) 句に読めない字があれば辞書を引けばよい。
 - (3) あえて難読俳句を作らねばよい。
 - (4) やたらに古語や漢語を駆使せぬほうがよい。
- 等があげられよう。ルビを必要とする側に立つ私としては、次のように反論したい。

まず(1)については、俳句を何十年も作ってきている方が読者の場合はそうかもしれないが、俳句創作の初心者、または俳句は作らぬが俳句愛好者という読者達など、いまや俳句人

口は増えるばかりで、その視野の広さは計り知れないものがある。このような現状で俳句経験の浅い人達に対して、ルビを付すのは当然の義務といえよう。

次に(2)については、辞書を引くにも読み方が解らなければ引くにも引けまい。漢和辞典で字画から引く手もあるが、俳句には辞書にも出ていない、俳句独特の読み方が多いのもルビを必要とするゆえんである。例えば「亡母」「亡父」「娘」「北風」「雨意」等、俳句や短歌でなければ通用しない読みがある。

(3)については、たしかに「俳句は平明がよい」(飯田龍太氏)と思う。しかし作者にとつては難解とは思っていないかもしれない。いわゆる「難読」とは一句における内容的なことでも、「難読俳句」とは意味が違う。

(4)については、俳句も万葉を原点とする伝統文芸である以上、古語は当然使われてもよいと思う。ただ漢語(中国古来の種々の熟語)については、むやみやたらに引用して、その言葉に凭れることはなるべく避けたい。

以上が私の反論である。

ところで現在私が受け持つ俳句の講座は、NHK学園のほか毎月十余か所あるが、これらの主な受講者は、男性では定年を過ぎた六十歳以上、女性では子育ても終わり、夫と二人暮らしの五十歳以上が圧倒的に多い。これら、より多くの人が俳句を作り、俳句の真の魅力を理解してくれることは大いに喜ばしいことである。そういう意味でも「難読俳句」に対して、ルビを付すということはすこぶる肝要なことと思う。

国文学者の故池田弥三郎ですら、「難読俳句」と題して、「句集を手にとることに、ふとためらいを覚えるようになった理由の一つには、むずかしい字があつて読めなくなったからである。(中略)読めない句がある、ということの不安が、わたしを句集から遠のけていることは事実である」(『若葉』創刊五十周年記念号)と述べておられる。「難読俳句」に、もしもルビが付けられてあつたなら、もっと句集も読まれるに違いない。

ここで「難読俳句」といえる作品例をいくつか抽いて参考に供したい。

◇季節にかかわる難読俳句

〈新年〉

料峭りょうせうの深空より降る松の塵 宣安 風生

「料峭」は春の寒さの身にしみることをいう。(春寒料峭

の意)

初昔はつむかしてふ美しき言葉はも 同

「初昔」は「宵の年」の副題で、元日になってから過ぎ去ったばかりの前年をかえりみていう言葉のことである。

歯固はがたや甘えごころに母のもと 岸 風三樓

「歯固」は歯を固むる義で、正月三が日に食べる特定の食物をいう。季寄せの先蹤と見られる北村季吟の『山之井』に「人は齢をもつて命とするゆゑ、歯の字をよはひともよむなり、歯固はよはひをかたむる心なり」とある。餅や搗栗など固いものを食べる。

お降りや枯れあたたかき羊歯の色 沢木 欣一

「御降みふり」は元日に降る雨や雪のこと、三が日にも用いる。

太簀たばしや煩燃えて待す吾子二人 石田 波郷

「太簀」は雑煮を祝うときに用いる白木の太い箸で、祝箸、柳箸ともいう。

とりわけしちよろぎの紅箸つけず 二木倭文夫

「草石蚕くさいしぐ」は「甘露子」とも書き、チヨロギの根茎の先端を取って梅酢につけておくと美しい紅色を呈する。正月、これを重詰料理の黒豆に添えていろどりにする。

月刊 槐

かい

平成三年七月創刊

主宰 岡井省二

編集 岡本高明

会員募集

誌代(送料共)
半年 6,000円
1年 12,000円

槐の会

〒573 枚方市山之上5-37-34

西田 孝方

電話 0720-44-1773

振替 大阪 2-28637

〈春〉

海髪抱くその貝殻も数知れず 中村 汀女

「海髪」は浅い海底の岩などに生じる紅藻類の一種、石灰をまぜた熱湯に入れ緑に変色したのを刺身のつまに用いる。

刻流れすでに 一些事業ゆる 岸 風三樓

「薬」は樹木の切株や根元に、小枝とともに萌え出してくる若芽のことである。

とかくして寄居虫貌出す後じさり 山口 草堂
黄心樹の花や時宗廟とこそ 山村 政子
花檻梓眸するどき諏訪かもめ 石田 あき子
紫荊枝の元末余すなく 西山 泊雲
〔「花蘇枋」とも書く〕

〈夏〉

接骨木の花咲けり何かにまぎれんと 加倉井秋を

霍乱や一糸もつけず大男 村上 鬼城

「霍乱」は急性胃腸炎カタルのことで、昔はコレラや日射病も霍乱と言った。暴飲暴食が原因で、はげしい嘔吐や下痢を起す。鬼の霍乱の成語もある。

夕刊におさへて殺す百足虫の子 富安 風生

〔「蜈蚣」とも書く〕

繡線菊の残んの花に遊び駒 同

「繡線菊」は海棠などと同じばら科の落葉小灌木で、多く観賞用に庭園に植えられる。

海蘿搔く餓鬼の檻より汐垂るゝ 上林白草居

「海蘿」は布海苔とも書き、浅い海岸の岩石などに生じる紅藻類の海草である。

恋葉とぞ這ふ蝶鯨踏みて啼かす 加藤知世子

〔井守〕「赤腹」とも。守宮に似るがやや大きい両棲類。

蛸蛸這ふ朝より何か腹立たし 受川 三蛇
給水船川口に鯖び海月くる 秋元不死男

〔「水母」とも書く〕

一帆の沖を指し航く南風つよし 岸 風三樓

〔「南風」とも読む〕

〈秋〉

鐵子に盞なむる酒量かな 岡本 圭岳

〔鐵子〕は鱧、鰻、鰯などの卵を胞のまま塩漬けにして乾

燥したもので、酒の肴に好適である。

蕒蕒のここたく踏まれ茶毘の徑 飯田 蛇笏

〔「蝦蟇」とも書く〕

浮塵子掃き湖莊も少し蒸す夜あり 富安 風生
鏡の面蟬の居て落着かず 岡本 眸
敗荷にあらあらしきは夕鴉 畠山 讓二

〔「破蓮」とも書く〕

〈冬〉

筵を沈めゆきしは鴉さへ知らぬ 岸 風三樓

「筵」は「竹簾」の副題で、細い竹を筒のように簀編みにして水中に沈め、魚を捕らえるものである。

海風腸をすすするや絹をすすすること 磯部尺山子

●自分の感動を自分の言葉で

月刊 俳誌 対岸

主宰 今瀬剛一

申込先

〒 311-43

茨城県常北町増井一三一九

振替 宇都宮九一三四七七

誌代 半年 五四〇〇円(送料共)

一年 一〇八〇〇円(送料共)

初心者歓迎! 会員募集中!

見本誌七〇〇円

鷹

藤田湘子主宰

誌代(送共)
半年 六〇〇〇円
一年 一二〇〇〇円

〒102 千代田区九段北一ノ一〇七
カーサ九段九〇五
鷹 俳句 会
電話(三三六)三三四七

海鼠のはらわたを塩漬けにした、いわゆる「塩から」で、酒客が喜ぶ。

海豚群に夕日さすらふ川奈村 杉山十四男
流水に海馬乗り来たる礼文島 川村 舟月
氷下魚網氷上雪のつもりたる 松原地蔵尊
標を履きて高野の人力車 福田 夢汀

◇季語にかかわらぬ難読俳句

秋天へ一炷わが臥竜観世音 富安 風生
「一炷」は香をひとたびくゆらすこと。一本の線香、または燈心のことをいう。

桑海に或いは沈み鯉鰻 岸 風三樓
「桑海」は海のように広がっている桑島(そうじま)の意。

海に還す水母の傷は海が医す 津田 清子

妻留守の日合の酒や冬灯 畠山 譲二
「日合の酒」は、その場にありあわせた酒の意。

薔薇夫人雀斑を水に浮かべたり 磯貝碧蹄館
「雀斑」は、そばかすの意。

「殯」は神式の「喪あがり」の意。

運動会見に来てゐたる乞丐かな 畠山 譲二
「乞丐」は乞食の意。

以上、まったく私の恣意によって作句例を抽いたが、まだ「難読俳句」は多々ある。

最後に、自分としてはこれからはなるべくルビを付さなくても読める句を詠むように心がけていきたいと思う。

〈付記〉ちなみに「重箱読み」(音訓を重ねた読み方)は不可とする向きがあるが、私は一向に差し支えないと思う。例えば、寒中に掲いだ餅のことを「寒餅」というが、「寒餅」とは言わぬとおりである。

寒餅も搗き町住みやかたくなに 村田 脩

月刊

鶴

主宰 星野麥丘人

新入会員歓迎
誌代(送料共)

半年 5,400円
一年 10,800円
見本誌 500円(切手可)

お申込みは
〒177 東京都練馬区
高野台4-9-11
鶴 発行所
振替・東京 8-137774
電話・03-3997-0056

ルビ俳句

ルビ俳句のこと ● 瓜生鐵二

碧梧桐・直得を中心に



大正十四年三月、河東碧梧桐の個人雑誌「碧」と風間直得らの「東京俳三昧稿」とが合併して俳誌「三昧」が創刊された。碧梧桐はこの雑誌に大正十四年十二月号から昭和二年十二月号まで二十四回にわたって「我等の立場」という俳論を連載している。これは後に「新興俳句の道」と題して昭和四年十一月に春秋社から刊行されているが、碧梧桐のまとまった俳論としては、最大にして最後の「感情の律動的内容」を基盤とした大作である。

そこには「感情の律動的内容」について「芸術には感情の純化に不足し、自己陶醉に陥る恐るべき自己催眠があるが、それを警戒し得た自信から詩が生まれる(一講)。「その詩を生む感覚衝動は生活希求と結ばれて、はじめて詩的直感直覚となるものであり(二講)。「刹那の心の動き、端的な感情の閃きといっても、生活の悠久性を含むべきものである(三講)」。このように「短詩は主として刹那の環境の刺激や印象に立脚するが、その感情の内容は伝統や因襲にとられない感受性でとらえられた、新鮮なものでなければならぬ」

ころ労働運動に入りかかったが、転じて画業に向かった。

・キリギリス鳴くやバアの女の椅子の太腕

・烟る雪の渾沌の奥に 土方小屋の灯

直得自身の言葉を借りれば「存在してゐる事実の形態に依って発生する偶然な描写」(写生)をした「海紅」期の句で、「第一次のリアリズムの時代」といえるであろう。

大正十三年「東京俳三昧稿」に拠り、翌年「三昧」に入った直得は、主要作家となる。碧梧桐は「三昧」誌上に大正十四年四月(第二号)から昭和四年十一月(第五十七号)に及んで「前号より」の稿を掲げ、同人の句で問題になるものにとりあげて評解を試みているが、中でも最も多くとりあげているのは直得の句である。

①ひとつ火鉢昨日からかいつかから水仕に荒るゝ手をかざす

②猫の毛髪にもつくとおしやべりな庭に出でつゝ

①の句について碧梧桐は、「何となく双棲生活を思わしめ、日常生活の情操の律動的な純真さが無礙に表現され、言葉の冗淡さが感じられない」と評している。

②の句については「体験の深さからくる自由な言葉のリズムがあり、飼いなじんている猫の毛が抜ける夏らしい情景と、それに関連する親しい女性に対する。幾分ニューモアを持った家庭的な悦びが味われる」と述べている。直得自身の言葉を借りれば、「存在事実によって、理智的にその情景を加へる描写法」となり、具体的美的表現主義をとった「三昧」前期の「第二次リアリズムの時代」の句といつてよいであらう。

(十四講)……等々の言葉で具体的な説明がなされている。

そしてその方法については「絵画化(写生)と音楽化(リズム)」とがある。普通は前者が採用されるが、後者も重要で、そこで定型律のような幼稚な迷信を脱し切れないのはあはれである(四講)。「表現となる言葉には抽象的(原響)と具象的(美響)との二面があり、詩人は後者に敏感でなければならぬ(九講)」と説いている。

こうした主張に基づき、碧梧桐は昭和三年頃から、

・手ずれた正月は遍路が笠を脇によせ松

・泳ぐところを上流が笏の夕べながめ

の中の「正月」「上流」に見るような、初歩的な「ルビ俳句」を作っているのである。

このように一句の中に視覚的效果と聴覚的效果を同時に演出するために考案された「ルビ俳句」であるが、その創始者は風間直得であった。

彼は明治三十年東京日本橋浜町に生れ、「海紅」からの作家であった。大正八・九年は北海道にあり、十年帰京、この

う。

直得は「第一次」「第二次」のリアリズムに継いで、今(昭和七年八月の「紀元」創刊の頃)は「第三次のリアリズムの時代」に入っており、「現実的可能性と現実の一致する」自らの内在的理由から発生する「必然性」をもった感情と主観性を、一句中に全一的に理性によって構成する表現法に進んでいるという。(以上の引用は『改造社版 俳句講座第八巻』の中の「紀元の人々とその主張 風間直得」による。)そして、そこに案出されたルビ俳句とは、短詩表現に必要な速度と緻密度 緊密簡約性・象徴性・飛躍性など一を求めて、近代の科学的機能、ことに印刷術と提携し、振仮名(ルビ)を表現に利用し、詩語とその内容を裏づける語を並置して読ませようとした技法であった。

俳誌「三昧」は、昭和七年六月を以て終刊となり、同年八月から「三昧」を改題した「紀元」が風間直得により創刊される。また同年十月には木下笑風らの発行した「壬申帖」に碧梧桐の「優退辞」が載せられている。碧梧桐は昭和五年二月の「三昧」誌上において、すでに選句のほとんどが直得選になっていた事実を発表し、三月には選者および編集人を公然と直得に譲り、「選者としての言葉」を載せている。そこには近頃の「三昧」句が形式的手法に傾き、沈滞して来たのは、選者たる自分の時代感覚の錯誤に基因するのではないかとし、しばらく閑地に退いて静観したいといった内容が記されている。そういった前触れあつての「優退辞」であつた

が、それは、従来自分は多くの同志をふるい落してきたが、今や落伍すべきところへ来た、芸術発展のために深く優遇をするという趣旨のものであった。

こうした中で師の碧梧桐と別れて、名実ともに「紀元」の発行主宰者となった風間直得は、自らが創始した「ルビ俳句」をさらに推進していったのである。「紀元」は昭和十二年三月号（通巻五〇号）まで刊行されていることは判明しているが、その後のことは分からない。

直得には昭和七年七月散義書房から刊行された句集『直得六百句選』がある。そこには大正八年から昭和六年までの句が収められている。（直得自らは「俳句」という言葉は用いずに、「自由律俳詩」または「俳詩」という言葉を用いている。）この句集の中からルビ俳句を取りあげてみたい。

浜名湖吟（昭和六年三月）

・權で蛭突、舟板バ割る、瀬水し、剝身口

直得はこの句について「この『シハミ』は湖水の淡水と潮水との差し合ひに起る、潮水と淡水との水層の現象の有様である。これはこの水面に経験のある、例えば、釣りをよくやる人ならば、直ぐにこの奇しき上げ潮時の水面の現象に感嘆の声を発するであろう。これは湖口へせり込む瀬水であったので、これに説明的叙事を要さず、瀬水と謂ふ観念性の言葉と同時に作者の実感の現実性『シハミ』とルビして、俳詩に属さざる領域を一句中から省略し、而もその現実の素材を効果的に大ならしめたのである。『剝身口』の場合も同

また「昭和六年、五月一日のメーデーの群雄を上野公園に見物中、一団の検束騒ぎに、逆にメーデー運動者の中に追ひ込まれ、遂に出ることを得ず、この労働群雄の一員となりすまして、遂に解散までこの群雄中に監禁の形となる。」という年譜記事を裏付ける。

・渦群に呼笛 ポリスも憤然 靴ける尊旗

・旗々砂塵 うち合ふ音 とどろのす女工

等の句、解散後独りとり残されてベンチに倚って作った。

・さえざえ寂ミ ベンチや紙屑 雨夕なす

等の句はプロレタリア俳句という側面からも注目してよいと思う。

直得の主宰した俳誌「紀元」の同人には中村烏堂、稲垣一鳴、井出台水、今井黙天、阿部木実男、江島雨煙、瓜生敏一らがいたが、同誌は直得の生活上の破綻から東京同人は直得を離れ、地方同人にも呼びかけ、昭和十一年一月、「紀元」とは別に「白塔」を創刊する。直得はそれでも、一部の地方同人や新人を糾合して、ほそぼそながら「紀元」を刊行しているが、先にも述べたように終刊年月は不明であり、その後の彼の消息も詳しいことは分からない。

「白塔」の人々は多く、「三昧」「紀元」を経て来た人々であるが、「白塔」の編集発行人として、中心的存在となるに至った中村烏堂（本名、富次郎）のことに触れてみたい。烏堂は明治八年兵庫県出石の生れ、若くして句作を始め、子規にも接した人であるが、長く朝鮮の京城に官吏生活を送っ

じく、蛭の剝身を直ちに口にする有様を、その現実の場合を効果的感覚のリズム性に依つて、表現したのである。（前出「紀元」の人々とその主張）といった自句自解を加えている。自動車に「オート」、飛行機に「パクオン」とルビしたら、読者は自動車、飛行機の活動をその速度を伴って直ちに感得出来る、そのような効果をねらっているのである。

「權で蛭突」の句は、釣好きだった直得の一面を物語っているが、直得には洋画家としての才もあり「直得六百句選」によると、昭和三年に油絵を各派綜合展国際美術展に、同六年に国展および国際展に出品したとあり、口絵に第七回国画会出品作品の写真を載せるほか、洋画作品の写真十葉を挿入している。

俳句は風土への挨拶

刊
月
に
れ

主宰・木村敏男

誌代・送料共

半年 三〇〇〇円
一年 六〇〇〇円

〒603 札幌市西区八軒十条西三丁目一三

にれ発行所

TEL 011・641・1343

振替 小樽 8・2615

た。昭和三年、二十数年に及ぶ官吏生活に終止符を打ち、内地へ帰還。「三昧」後期から「紀元」「白塔」へと、ルビ俳句に大きな影響を与えた人物であり、ルビ俳句を語るには逸することの出来ない人物である。

・終電車も押合し、吊皮腕をよ灯、雪のしるく

・白い峡空、温泉す屋伏せみ 灯しまへ

こうしたルビ句は、烏堂が生涯をかけて研究した日本の古代言語と深い関係がある。彼は遺著となった『万葉集難解歌新説』（昭和三十年七月刊）の「はしがき」で、「私の生涯をかけた研究の題目は日本語の歴史である。それは発生より発達に及ぶ歴史を考究する特殊な仕事である。この仕事にはなるべく古い日本語を資料とする必要があるので私はその語彙

座の文学としての俳句・現代連句の実践

主宰・宇咲冬男

あした

月刊

誌代

半年 四、八〇〇円
一年 九、六〇〇円

発行所

〒114 東京都北区豊島四ノ一六ノ三四ノ四〇三
あしたの会 振替・東京五一九七三八

を古事記と万葉集に求めることにした。」と述べている。これ以外の彼の研究成果としては『元始日本語』『万葉東歌新釈』『万葉東歌百首』『万葉百首選』『防人の歌』『古事記原義』（上巻・下巻）『古事記日本書紀の歌』『万葉難解歌考』などがある。ルビ俳句に先鞭をつけたのは風間直得であるが、日本の古代言語の研究から得た知識を俳句に援用、ルビ俳句に密度と速度を賦与する端緒を開いたのは鳥堂であった。つまり鳥堂は、現代語はいうまでもないこと、古語・雅語・俗語・方言・新造語などあらゆる短音を俳句の世界に摂取する端緒を開き、その推進役ともなったのである。

ルビ俳句とは漢字のふりがなを詩語として極度に利用し、かなとルビを読むことによりリズム感を出し、意味はかなまじり漢字を見ることにより了解させようとする表現技法を用いた句であるとも定義できるが、それは漢字で日本語を表記するために作り出された表音文字、つまりは万葉仮名の用字法にも通ずるところがある。中でも「暖」「寒」「金」などのごとく、意味を汲んで読む義訓と呼ばれるものや謎を解くようにして読む「山復有山」「追馬喚犬」のごとき戯訓と呼ばれる用法は、ルビ俳句の用字法に多分な影響を与えている。その他に先に述べた「紀元」の人々について、その代表句を挙げると、

- ①今夜し雪く、かまきり、をこにも怒ちて、この去なね
②岩で釣る女等、上げ潮、岩の夕陽荒し
③夕方しばしも餌忙鶏は、三月そこはかに、物萌る

一鳴
台水
黙天

- ④気球広告、晴空を屋根面に夕陰、サイレン
⑤西南風、雨上朝と通動路、煙々東雲
⑥街霧中に黙々群衆行進く陳列窓夕陽漂ふ
- 敏一
木実男
雨煙

以上大まかに「三昧」から「白塔」期におけるルビ俳句の発生過程とその代表的俳人のことについて述べてきたが、日本大学教授曾根博義氏によつて、ルビ俳句を創案した直得の中心理論ともいふべき「句技の速度と緻密度（上・下）」今日のルビと句点についての情性（「三昧」77・78号 昭和六・七・八）が、伊藤整の「文学技術の速度と緻密度」（『文芸レビュー』昭五・一〇）のほとんど剽窃に近いものであることが指摘されている。そのことについて栗田靖氏は「直得は、当時の碧梧桐の俳論がいわゆる『新心理主義』の影響を受けている事を逸早く感じとり、その具体的な方法としてルビ俳句を考案するとともに、その理論的裏付けを急ぐあまり、伊藤整の評論を安易に転用したのと思われれます。」（『碧梧桐全句集』解説、平成四年四月刊）と述べている。それにしてもルビ俳句の句技は「末梢的な技巧で、難解で、国語の虐使で、発展生長するはずがない」（河出書房版

『現代俳句事典』といわれたり、「日本語そのものの破壊のわざ」（中村草田男・至文堂『日本文学教養講座Ⅳ』）と非難されたりし、事実その後はとだえている。碧梧桐を邪道に導き、俳壇引退の幕引きを早めたのは風間直得いや「ルビ俳句」のせいだという非難もある。それほどまでに「ルビ俳句」は悪魔的存在なのであるうか。

「ルビ俳句」の実作者でもあった阿部喜三男氏は「読仮名・振仮名の使用は従来からもあり、これほどでなくても、詩歌にはその特殊な利用が見られる。漢字、仮名併用の表現法が存続する限り、今後これに類する技法が絶対に起こらないとは言ひ切れないものがあるう。」（『河東碧梧桐』）とも述べている。

碧梧桐は「紀元」には参加していないが、ルビ俳句を依然容認し、自らも進んで作っている。最後に碧梧桐の、
・老妻若やぐと見るゆふべの金婚式に話題りつぐ

の句を取り挙げてみたい。この句は「金襴帯かやぐをあやかに解きつ巻き巻き解きつ」の句と並ぶもの。この後十日ほどで急逝する碧梧桐の最後の句である。『昭和日記』の中の句で、昭和十二年（碧梧桐六十五歳）一月十九日の条に「もう十二年すれば金婚式になるやうだ、此頃妻が水木から錦の丸帯を買った。曰く我々の金婚式に結べると、お前金婚式まで生きてゐるつもりかと笑つたが、もう十二年位ならノラクラしてゐるうちに来そうな気がする」云々とある。

阿部喜三男氏はこうした句を帰着点に得た碧梧桐について、「無季・自由律に進んでも、かれの短詩の骨格は従来の俳句を継いでいた。短歌からそれを研究し意識的にとり入れた形跡は、万葉集を云々した以外ほとんどない。やはり彼の作は俳句の領域で見らるべきであり、近代俳句史はこれを認容する広量をもつべきである」（『河東碧梧桐』）とも述べている。

俳句は全人格の投影

創刊 細川加賀

月刊 初蝶

主宰 小笠原和男

我、かく生きたりの証し

見本誌 五〇〇円（切手可）

誌代千共
6ヵ月 4,800円
1年 9,600円

初蝶発行所

〒260 千葉市松波2-18-5

高野方

電話 0472-51-5013
振替 東京 5-182425

総ルビ論

書くことと読むことの自覚

●林

桂

俳句の「るび」について



高柳重信の俳句に「るび」が現われたのは、『山海集』(昭和五十一年刊)の「飛驒」の連作十句からである。

飛驒の
美し朝霧
朴葉焦がしの
みことかな

飛驒の
大嘴の啼き鴉
風花淡の
みことかな

飛驒の
山門の
考へ杉の
みことかな

飛驒の
風早の神無月
猪威しの
みことかな

「飛驒」という言葉で呼び起こしたさまざまな情景が、そのまま座五の「みことかな」という言葉に抱き取られて、そのことで神格的な生命を付与されることになるというこの俳句の構造は、「飛驒」という言葉で呼び起こされる地霊の神

格化の試みであつたろう。

その時、高柳重信が、従来の多行形式に加えて「るび」を新たに採用したことは興深い。重信の「るび」の初発の意味を知る上で大切な問題であろう。もちろん、「美し」や「山門」「風花淡」「猪威し」といった言葉の読みの指定をする必要を感じとった実際上の問題があつたのかもしれない。

しかし、それならば、この「飛驒」以前にも「るび」を振られてしかるべき言葉はすでに出現していたはずであるから、むしろそれまで「るび」を選ばないできた重信が、あえて、ここ「飛驒」で「るび」表記を選んだのは、自ずから違うレベルの問題であつたということになるであろう。重信のここでの「るび」は、実用以上に自覚的な表記意識のあらわれであつた。それは言えば、降霊の儀式のための言葉のようなものであつたろう。「飛驒」の地霊が「みこと」として出現するためには、日常の言葉を越えた、そして実用を超えた「るび」付きの言葉に導かれ、かつそれを伝わる以外に現われないと、重信は直感したゆえの表記であつたという

ことである。

こうした表現意識は、例えば夏石番矢の最新句集『桑浪』(平成四年刊)の次のような作品に受け継がれている。

青海初雲
治初雲
飛羽矢若日命哉
豊羽矢若日命哉
石窓命哉
火出見命哉

もちろん当然のことながら、こうした表記の根本には、重信にとっては多行形式の俳句の表記と地続きの問題である。「書く」という自覚と、書かれた俳句を視覚を使って「読む」という自覚が存在しなくてはならない。そしてそれは、現代の「詩」の表現として欠くべからざる問題のはずである。

本来的に「うた」(詩)は「歌われ」「詠まれる」ものであり、そして「聞かれる」ことが第一義であつた時代、それは基本的には「俳諧の時代」をもその射程に収めてよいものであるが、「書かれる」こと「読まれる」ことは、「詩」表現の主役の座にはいなかったというべきであろう。もちろん、柿本人麻呂の時代から優れた詩人は常に「書く」ことに自覚的であつた。また、極度な言葉の集約化を迫られた「俳諧」にあつても、時には「詠まれ」「聞かれる」ことだけでは一般的な伝達には不可能な言葉まで要求する場合も想定されるが、それはその中にすでに「書く」「読む」ことの必要性を呼び込んでいるとも言える。そして、それは現代俳句の問題

とも地続きのはずである。

表現上の制約が強いだけ、「俳諧」や「俳句」にとつて、「書く」ことの自覚が、「短歌」などよりもはるかに痛切な問題でよいはずである。にもかかわらず、現在の俳壇でも「書く」ことを自覚化して問題にすることを嫌う傾向は強いように思われる。一方で、それは「定型詩」の持つリズムが「歌う」ことを「書く」こと以上に自覚させているゆえかもしれない。

しかも、現在の詩歌における「書く」意識の自覚化は、恐らく改行表記を伴う「近代詩」に発するところが大きいだろうから、そうした影響関係を嫌うこともあるのであろう。なおかつ、そうした「近代」の強い「書く」意識が希薄化させた「歌う」ことの意識を再評価しようという流れは、例えば福島泰樹の「短歌」の「絶叫コンサート」や詩人の朗読の試みなどによって行なわれているところでもある。

しかし、なによりそうした再評価の前に「俳句」では、「書く」意識の定着そのものがまだ十分に行なわれているとはいえない状態にあるというのが現状である。なにゆえに「詩歌」の「書く」自覚は、これほど遅れ、なおかつ十分に行き渡る認識とならなかったのであろう。日本には「書」という「書く」こと自体を表現目的とする芸術さえ存在するのにある。もっとも、これは全くの当て推量だが、あるいはこうした「書く」こと自体を目的とする「書」の存在そのものが、詩歌を創作する上での「書く」意識の意味を希薄化さ

せて、作者から切り離してきたものなのかもしれない。言わば作者によって「詠まれた」詩歌は、また、書家によって「書く」上での表現の変化の可能性を残したまま委ねられてきたようにに思われるのである。平仄や文字数、対句に縛られている「漢詩」などは、作者の「書く」意識を書家によって動かす余地が残されているとはほとんど思われないが、変体仮と散らし書きによる空間意識を持つ「書」は、また「書名く」ことが、作者から離れた書家による常に一回性のものとして表現されてきたのではなかったか。

この「書」の魅力に、現代の俳人でさえほとんど勝てないのが現状であろう。一行棒書きを主張する俳人も、ここではまったく違った論理の場を感じて、改行し散らし書きを行なう。逆に、分かち書きを主張する俳人の評論では、こうした散らし書きを根拠に自分の分かち書きの方法を述べているのを見たことがある。むしろ、これらはどちらも容易に俳人を連れた「書く」場に連れ出すことができることを物語るものであると同時に、表記の意識の希薄性を物語るものと見るべきであろう。それは何もその俳人個人の問題というのではなくて、「詩歌」の伝統的な表現の問題なのではないか。だからこそ、これはいまだに超克するべき現在の課題たりうるということができよう。

もつとも、問題を「書く」自覚としての「るび」について考えるならば、これはまた新しい問題である。最初に高柳重信の「るび」の意味について述べたように、これは「るび」

の新たな発見だからである。もちろん、重信が最初の発見者であるというのではない。「るび」表現の魅力に邂逅した表現者は少なくないからである。そうした表現者すべてをひくくめて発見者と呼んでもよいであろう。なぜならば、「るび」とは第一義的には「読む」ための自覚的で実利的な表現がその最初にあったのだから、これら発見者はそれを「書く」方法へ自覚に移しかえたことになるからである。浅学にして「るび」（ふりがな）の歴史をつまびらかにしないが、經典を「読む」ために振り込んだ片仮名や漢文「訓読」のための返り点オコト点に源流はあるのであろうか。すでに江戸期の版木印刷には「ふりがな」が見えている。これも庶民が「読む」ことを想定してのものだったのであろう。これから言えば、「るび」は表現を担う「書く」行為の範疇にはなくて、「読む」ことを支える記号の範疇にあるものだったと考えて誤りはないであろう。「発見」とは、こうした記号から表現への範疇の組み替え作業のことだということができる。

「るび」を振る俳句を書く作家の中でも、最も過激な表現をする森山光章の『眼球呪咀吊り変容』の作品は次のようなものである。

胸奥に楡の花が匂う * 少年は処刑に点る！
偽仏の来迎する夜は 円環で遊べ！
我の覚醒が〈甲虫〉へと外化する 組織の夜

当然、森山の試みに賛否両論はあるだろうが、「処刑」「円環」「組織」に振られた当て読みの「るび」は、「読み」の補助手段である記号であることを超えて、「書く」ことを通して「表現」する自覚的な方法論に根拠を持っている。「るび」を、あくまで「読み」の補助手段と考える立場にあっては、邪道もよいところの表現であるが、「るび」を自立した「書く」表現の範疇に組み替える立場の急先鋒が早速迎刃着くだろう必然的な表現方法であることもまた間違いないのである。それは「読む」ことの立体化を迫りつつも、また「詠む」「歌う」ことからは遠ざかる表現行為でもある。

しかし、「歌う」立場からは、忌避されるだろう表現方法ではあっても、表現の可能性としては不可避的な道筋のひとつであることまでは否定することはできないであろう。私もまた、長らく作品に「るび」を付す表現を試みている一人である。多行形式の作品にも付しているし、詞書きを伴

った一行棒書きの作品にも付している。あるいは、奇をてらう「意匠」持ちと見られ、また高柳重信の影響をいつまでも脱し得ない俳人と考えられているかもしれない。

しかし私のこの表現を支えているものは、潜在的にも自覚的にも「作者」として総てを「書き」きりたいという強い欲求と、「るび」の自律的な表現の可能性である。るび表現を伝わって降臨する詩神の存在を感じているからである。言え、多行表現を取るのも「書き」きりたいという欲求が私の根にはある。また、「詞書き」も伝統的な表現方法に根拠を持ちながら、かつそれを自覚的に「書く」表現として取り出すことで人工的な「表現の場」を作り、そこに作品を晒すことで、作品の自立を逆説的に確かめようとする方法であると考えている。同じように「るび」も、「書く」表現の可能性を秘めているよう。

天為

有馬朗人 主宰

編集 大屋達治

誌代(送共)
半年 6,000円
1年 12,000円

天為俳句会

154 世田谷区三軒茶屋
2-23-6 有馬方
振替・東京 8-545251

辞典の手引き

難読語を調べる・笹原宏之



俳句を読んでいると、しばしばわからない字や読み方の難しいことばに出会う。

父と子や 標の跡混へつゝ 波郷

この「標」を調べるとなれば、漢和辞典にあたるのが常道である。とにかく「木」偏の字だということで、部首・画数順索引の「木」の部の十一画を引いてみる。または、旁の「累」の字音が「ルイ」だと知っていれば、音訓索引で探してみてもいい。あるいは、総画数を数えて、総画索引の十五画のところを当たる。それで見つければ、めでたしめでたしというわけだが、この字は一万字程度を収録した小型の漢和辞典には出ていないことがある。そこで、もっと大きな辞典を調べる。やっと、「標」が「かんじき」だとわかって、ほっとする。

漢和辞典は、本来、中国の古典に出ている漢字、漢語を調べるものだが、最近では、漢字で書かれることばならば日本製漢語や和語であってもなるべく収めるようになってきた。諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店、14巻、一七万三〇四〇

円)は、約五万字、五〇万ほどの熟語を載せた最大の漢和辞典で、漢字、漢語だけでなく、日本語の百科項目や和語の難読語も含んでいる。上田万年ら『大字典』(講談社、五九七〇円)、諸橋轍次ら『広漢和辞典』(大修館書店、4巻、六万九〇一〇円)、鎌田正・米山寅太郎『大漢語林』(同、一万八八〇〇円)、尾崎雄二郎ら『大字典』(角川書店、一万九八〇〇円)、林大『現代漢語例解辞典』(小学館、二三〇〇円)などには同書にない例も見られる。

小型辞典では、小川環樹ら『新辞源』(角川書店、二一〇〇円)が便利である。

漢和辞典には、漢字の意味や熟語が解説されているが、とにかく読み方だけがわかればよいという向きには、そういう辞典がある。武部良明『漢字の読み方』(角川書店、一三四〇円)は、画引索引もあるが音読みを旁から類推して五十音順に配列してあり、難読語も簡便に引き当てられる。例えば、「砧」の字音は「チン」だが、この辞典では「セン」で

引くと、「セン」は誤りだとしながらも、そこで「きぬた」という訓がわかるようになっていく。遠藤鎮雄『漢字の読み方辞典』(東京堂出版、一九〇〇円)も音訓順だが部首索引もある。

漢字そのものは難しくなくても、読み方のわからないことがある。

病葉のほそきが落つる早さかな 青 畝
初対面そざる水鶏の夜に入りぬ 草田男

この「病葉(わくらば)」や「水鶏(くいな)」は、いわゆる難訓に属するものである。この類は、とにかく第一字目の漢字で引いて、それで始まる熟語の読み方が載っているものが使いやすい。このような難読とみられる表記だけを集め、漢和辞典の方式で引けるものに中山泰昌『難訓辞典』(東京堂出版、三八〇〇円)、高橋秀治『難読語辞典』(同、一七〇〇円)、杉本つとむ『近代文解読辞典』(雄山閣、近刊)などがある。やや専門的になるが、林陸朗『古文書・古記録・難訓用例大辞典』(柏書房、一万三三九〇円)にも多数の例があがっている。

国語辞典にも漢字の画引き索引を付録としたものが少なくない。例えば戦前の『大辞典』(平凡社、2巻、四万四二九〇円)に「漢字総画索引」があるように、大規模な辞書は漢和辞典のように引くこともできる。最近の尚学図書『国語

大辞典』(小学館、七八〇〇円)、金田一春彦・池田弥三郎『学研国語大辞典』(学習研究社、六〇〇〇円)、林大ら『国語大辞典 言泉』(小学館、五八〇〇円)、新村出『広辞苑』(岩波書店、六五〇〇円)などにも付録に「難読語一覧」などがあり、読み方の手がかりが得られる。『大辞典』は浄瑠璃の外題や固有名称、一字漢字の読みも豊富である。

ある漢字が漢和辞典で見当たらないケースがある。漢和辞典は漢字のさまざまな異体字や国字といわれる日本製漢字も収めつつあるが、なお不十分である。芭蕉の「さみだれを集めて早し最上川」の「最」の字は、もとは「取」になっている。これは、中国の俗字だとされるが、普通の漢和辞典の見出しにはない。あるいは、同じく芭蕉の「あそび来ぬ鰯釣りかねて七里迄」の「鰯(ふぐ)」は、「河豚」と「魚」を組み合わせたような、妙な字である。これは国字だとみられる。

そこで、漢和辞典の要領で引けるものに、山田勝美『異体字解読辞典』(柏書房、一八五四円)、有賀要延『難字・異体字典』(国書刊行会、七八〇〇円)、菅原義三ら『国字の字典』(東京堂出版、一五〇〇円)などがある。

国字については、エッソ・オバタ・ライマン『日本人の作った漢字』(南雲堂、三〇〇〇円)付録「国字一覧」や、前出の『大字典』(角川書店)付録「国字一覧」などにも当たってみるようになる。ただ、これらには普通名詞のほか固有

月刊
俳誌

嵯峨野

主宰 村沢夏風

新入会員募集

会費1ヵ月	800円
半年	4,800円
一年	9,600円

見本誌請求

(見本 600円) 切手代用可

嵯峨野発行所

〒615 京都市右京区西京極
東町22-11(北尾方)
電話 075-311-4752
振替・京都 1-28713

名詞に使われた国字も有名なものは含まれるが、出ていない字も多く、また載っているから国字だとも即断はできない。

*

漢字で表記された語がどういうものを意味しているのか、その性格がだいたい見当がつく場合には、個別の専門的な辞典を使った方が見つけやすいことがある。

季語であれば、中村俊定・関森勝夫『難解季語辞典』(東京堂出版、四六三五円)が画数からも引くことができる。

あて字の場合、「仙人掌(サボテン)」「布哇(ハワイ)」などの外来語、外国の固有名詞であれば『宛字外来語辞典』(柏書房、三六〇〇円)、一般的な熟字訓を含み、漢字の音の五十音順に並べたものに『当て字の辞典』(東京堂出版、一八〇〇円)がある。外題もあて字を多く含むが、野島寿三郎『歌舞伎・浄瑠璃外題よみかた辞典』(日外アソシエーツ、九七〇〇円)などがある。「公魚(わかさぎ)」や「杜若(か

きつばた)」のような動物や植物の名には国字を含めて『動植物名よみかた辞典』(同、一万九八〇〇円)がある。

人名に関しては、姓ならば『難訓辞典』の付録のほか、大野史朗・藤田豊『難読姓氏辞典』(東京堂出版、一八五四円)、丹羽基二『日本姓氏大辞典』(角川書店、二万二七〇〇円)、名ならば荒木良造『名乗辞典』(東京堂出版、二八八四円)、『名前の読み方辞典』(同、一八〇〇円)で、音や画数などから検索できる。これらはすべての例を収めるわけではないので、『日本姓名よみふり辞典 姓の部・名の部』(日外アソシエーツ、2巻、各九九五〇円)、『日本著名人名・人名典拠録』(同、4巻、七万八〇〇〇円)なども参考になる。

地名については、『日本地名大辞典』の『日本地名総覧』(角川書店、二万二〇〇〇円)に『難読地名一覧』があり、刊行中の『日本歴史地名大系』(平凡社)の各巻にも同様の一覧がついていて、画数から読みを見つけられる。両書で現

行の行政地名は網羅されるが、検索できない歴史的地名、自然地名や俗称地名、小字名などもあり、また載っていないものによって異なる読みを示すものもある。

それらは、漢和辞典のような検索もできる吉田東伍『増補大日本地名辞書』(富山房、8巻、各一万九三六四円)、『現代日本地名読み方大辞典』(日外アソシエーツ、7巻、各一万五四五〇円、索引八二四〇円)、山口恵一郎・楠原佑介『難読地名辞典』(東京堂出版、二八八四円)や『島嶼大事典』(日外アソシエーツ、一万九八〇〇円)、『河川名よみかた辞典』(同、九九〇〇円)、徳久球雄『コンサイス日本山名辞典』(三省堂、二八八〇円)などで補えるものが多い。

*

近代・現代の俳句に見られる難読語の多くは、近世の用字を反映したものである。もし、その典拠をさかのぼって調べようとするならば、中世から近世にかけて刊行された「節用

集」と総称される国語辞典の類を見る必要がある。また、江戸時代には、今日の歳時記の前身に当たるものが多数出版されている。それらは、現在覆刻されて見やすくなっているが、専門的に過ぎるので、簡単に入手できるものを一つだけあげておく。

『毛吹草』(岩波文庫、七〇〇円)は、近世初期の俳諧成立当時の作法書である。この中には、季語、縁語、諸国名物などがあげられており、あて字や熟字訓なども少なくない。「山葵(わさび)」「氷柱(つらら)」など、現代と同じものも、もちろん載っている。「樞」は、今では「そり」と読まれることが多いが、ここでは「かんじき」と読んでいる。このような例を見ていると、あきることがない。

右に掲げた辞典の類は、現在入手できるものに限った。なお、本稿執筆にあたっては、野村雅昭氏(早稲田大学教授)のご教示によるところが大きい。

屋根

主宰 斎藤夏風

三つの柱

伝 統
句 会 活 動
写 生 文

誌代
半年 6,000円
一年 12,000円

〒178
練馬区大泉学園町7-20-14
斎藤方
屋根発行所
振替・東京 3-130418